

改良型複合交信攪乱剤コンフューザーMMを利用した モモ害虫防除

福島県果樹試験場 病理昆虫部

平成17年度試験研究成績書

分類コード 04-02-23000000

部門名 果樹－モモ－病虫害防除

担当者 荒川昭弘・相原隆志・阿部憲義

I 新技術の解説

1 要旨

- (1) 従来、モモ用の複合交信攪乱剤としてコンフューザーPを使用してきたが、本剤のハマキムシ類成分であるテトラデセニルアセテート(Z11-14:Ac)に対するリンゴコカクモンハマキの抵抗性系統が出現し、十分な交信攪乱効果が得られなくなった。この点を改良するため、新製剤ではリンゴコカクモンハマキの主成分である Z9-14:Acを加えたトートリルAに置き換えた。
- (2) 本剤は、他の改良製剤同様針金を除いたツインチューブタイプであり、使用後の廃棄が容易になった。
- (3) 本剤の使用により、モニタートラップへのリンゴコカクモンハマキ成虫の誘殺は見られなくなるとともに、本種による被害も減少したことから、本種への交信攪乱効果は高いと判断される。その他の対象害虫に対しては、既存剤のコンフューザーPと同等の防除効果が得られている。

2 期待される効果

リンゴコカクモンハマキの多発が予測される場合には、6月上旬や7月下旬にハマキムシ類に対する防除剤を定期散布する必要があったが、本剤を使用することによりハマキムシ類防除剤を削減することが可能になる。

アルミ線が除かれた改良型製剤はツインチューブとなり10a当たりの処理本数が少なくてすむことから、設置および廃棄の手間が大幅に改善される。

3 適用範囲

県内のモモ栽培地域

4 普及上の留意点

- (1) モモシンクイガの攪乱成分も既存剤と同様に含有するが、現在は未登録である(登録申請中)。
- (2) 登録作物がモモに限られている。とくにネクタリンには適正がないので注意する(現在、果樹類に登録拡大申請中)。
- (3) 交信攪乱対象害虫であっても、多発条件下では十分な防除効果が得られないことがあるので、害虫の発生密度を事前に十分調査し、使用前の密度を低下させておく。
- (4) 殺虫剤の削減は対象、対象外害虫の発生状況を確認しながら徐々に進め、急激な削減は行わないこと。

II 具体的データ等

表1 試験期間中の性フェロモントラップへの誘殺状況（2005年、桑折町）

処理製剤名	ナシヒメシンクイ	モモシンクイガ	リンゴコカクモン ハマキ	モモハモグリガ
コンフューザーMM	0	0	0	0
コンフューザーP	0	0	12	0

調査期間：5月15日～8月31日

表2 モモのリンゴコカクモンハマキに対する防除効果

（2005年、桑折町）

試験区	調査 果数	リンゴコカク モンハマキ 被害果数	同被害 果率
コンフューザーMM	100本／10a	500	3
コンフューザーP	150本／10a	500	38

7月25日調査

表3 モモのモモシンクイガに対する防除効果（2005年、桑折町）

試験区	調査 果数	モモシンクイガ 被害果数	同被害 果率
コンフューザーMM	100本／10a	500	2
コンフューザーP	150本／10a	500	1

7月20日調査

表4 モモハモグリガに対する防除効果（2005年、果樹試および桑折町）

試験区	調査 葉数	モモハモグリガ 寄生葉数
果樹試 コンフューザーMM	100本／10a	1000
コンフューザーP	150本／10a	1000
桑折町 コンフューザーMM	100本／10a	1000
コンフューザーP	150本／10a	1000

7月20日調査

Ⅲ その他

1 執筆者

荒川昭弘

2 主な参考文献・資料

平成15年度試験研究成績書